優雅に航(ゆ)く
冒険の船旅へ

一生に一度は見てみたい、絶景がある。
雪と氷が織りなす南極の景色は、その筆頭だ。
せっかく地の果てまで行くなら、優雅な客船で行きたい。
極上のフランス料理のフルコースをいただきながら、
外には白銀の世界が広がる、ポナンの南極クルーズをご紹介しよう。

写真・文＝水本俊也

PONANT
YACHT CRUISES & EXPEDITIONS

最高の客船、クルーとともに
極上の極地クルーズへ

「旅」はまだ見ぬ土地との出会いであり、想像の段階から心の冒険は始まっている。「南極」と聞いて、何を思い浮かべるだろう。ペンギン？　氷山？　机上では計算し尽せない旅、それを人は「冒険」と呼ぶのかもしれない。

初めて南極の地を踏んだのは、2004年のことだった。あれから数えて、今回7度目の南極。しかも南極クルーズの先駆者として知られるフランス船社ポナンの最高の客船で、最高のクルーとともに、冒険の船旅が始まった。

南極観測越冬隊員の現地任期は1年4カ月と聞くが、一方の南極クルーズの定番は10日間〜2週間程度、日本からの往復を含めても2週間前後で行ける。旅の日数でいえば、少し長めのヨーロッパ旅行と変わらない。

ただし行き先はやはり極地である。天候、気象、海、氷の状態などあらゆる条件と安全面を踏まえ、知識と経験が豊富なエクスペディション・リーダーと呼ばれる南極など極地の専門家と船長により、詳細な航路と行程が日々決定される。それはまさに冒険の船旅そのものである。

今回は南米アルゼンチンの港町、ウシュアイアを発着するコース。真夏のブエノスアイレスを経由し、

南米最南端の町、ウシュアイアへ。南極クルーズのシーズンは例年12月～3月頃、この間のウシュアイアの最高気温は10～15度で、自然と調和した街並みを満喫するには、日の長いこの時期が最適だ。

乗り込むのはポナンの「ル・ボレアル」。乗船時に配布される赤色の防寒パーカーを身にまとい、薄暮のウシュアイアを出航した。市街地と1000メートル級の山々が落陽にまぶしく照らし出されるなか、ビーグル水道に沿って船は静かに進む。

南極への所要はおよそ2日間。南米大陸と南極との間に位置するドレーク海峡は「吠える40度、狂う50度、叫ぶ60度」と称される南極への登竜門。この悪名高き海峡も、幸運に恵まれれば「ドレークレイク」と呼ばれる、湖面のようにたおやかな海になる。

今回のドレーク海峡は幸いに10段階でいえば2段階ほどの波やうねりの状態。ロールスロイス社製の横揺れ防止のフィン・スタビライザー（船体制御システム）により、船内レストランで振る舞われるテーブル上のフランスワインも水平を保ったまま。快適なクルーズライフそのもので、その様子はポナンのクルーズが極上と称されるゆえんでもある。

南極に到達すると、ゾディアック（エンジン付きゴムボート）に乗って、氷の世界に繰り出す。赤いパーカーや長靴は、ポナンが用意してくれる。黄色いジャケットを着ているのが、エクスペディション・スタッフ（専門家）たち

1 ウェッデルアザラシののんびりとした昼寝姿が愛くるしい　2 ザトウクジラは地球上の動物の中で最大級。バブルネットフィーディングという独特の狩りを行う群れに遭遇することもある　3 ペンギンは5メートル、アザラシは10メートル、それぞれ人間が動物との距離を保つための目安。南極上陸では環境にも配慮したい　4 ペンギンの中では最も個体数が多いヒゲペンギン。喉を通る帯模様が名前の由来

地球を知るうえでも写真を撮るうえでも特別な場所

出航後3日目には、サウスシェトランド諸島のアイチョー島沖に到着。本来は終日航海の予定だったが、波静かなドレーク海峡がわれわれを迎えてくれたおかげで、今クルーズにおける南極初上陸の日へと変更になった。天候、条件に左右される極地クルーズだが、時にうれしい誤算もある。

早朝には10頭ものナガスクジラがル・ボレアルを出迎えてくれた。過去さまざまな動物に出会ってきた南極クルーズだが、ナガスクジラとの遭遇は初めての経験だ。

午前中は南極上陸に際しての船内レクチャーを受講。午後、ゾディアックに乗り換え、小雪舞う中、南極に初上陸した。再びこの地にやってきた満足感、充実感に満たされる。南極という場所は地球を知るうえでも、写真を撮るうえでも、自分にとって最も大切な場所のひとつだと強烈に感じる。

旅のハイライトは、日替わりでやってくる。ポナンが誇るフランス料理のフルコースに舌鼓を打つ間に、ふかふかのベッドで安眠している間に、船が波穏やかな南極の海を移動し、極限の地で絶景から絶景へと誘ってくれる。

そして船の窓から見える絶景の間から、ゾディアックボートの上から、さらには上陸地において、南極ならではの動物たちとの素晴らしい出会いが待っている。ネコハーバー沖では朝食の時間帯にザトウクジラがあいさつ代わりに顔を見せてくれた。上陸する先々で好奇心旺盛なペンギンたちが珍しい来訪者、つまりわれわれ人間に対して、愛嬌をたっぷり振りまいてくれる。

南極半島より南で繁殖するペンギンはアデリーペンギンとコウテイペンギンに限られる。後者を南極半島で見られることは稀だが、アデリーペンギンに加え、両目をつなぐ白い帯模様が特徴のジェンツーペンギン、文字どおりあごのヒゲ模様が可愛いヒゲペンギン、いずれかのペンギンをほとんどの上陸地で目にすることができる。

アデリーペンギンはチューイングガムのパッケージやJRのICカードのキャラクターにも採用されており、日本人にとってもなじみ深い。彼らが眼前に自由に歩き回る姿に、目が釘付けになる。

上：引き込まれそうなほどのブルーアイス。氷は青い光を反射するため、青く見える。ペンギンの白と黒が映える　下：流氷に乗ったヒョウアザラシ。ゾディアックに乗るとさまざまな動物たちを船上から観察できる

ルメール海峡の両岸には茶色の崖がそびえる。南極では誰もがシャッターを切りたくなる絶景に次々と出会える

南極を最も愛する人たちと絶景に次ぐ絶景を

朝から晴れ間の見えた南極のある一日。さかのぼること1世紀以上前、フランスの南極探検隊によって発見され、探検隊の後援者である政治家の名から命名されたポートロックロイの地に降り立った。静かな湾に面した土地には、1944年に初めて英国の基地が建てられ、今では夏の間だけ観光客を迎え入れてくれている。そこにはなんと、旅には欠かせない土産物店も！　基地の建物の周りにはペンギンのルッカリー（集団営巣地）があり、捕鯨地であった頃の様子が伺えるクジラの骨々を目にすることができる。基地に暮らす隊員数人に対し、基地のある島自体は無数のペンギンたちに半ば"占拠"されていた。いやむしろ、ペンギンたちの地に人間がお邪魔させてもらっていると言った方が正確だろうか。

南極クルーズ最大のハイライトはなんといっても雄大なルメール海峡だ。全長11キロメートル、幅1・6キロメートルの海峡で、一番狭いところは幅800メートル以下。この海峡の両岸には海上300メートルにものぼる切り立った岸壁が迫り、船上から眺める

上：エクスペディション・リーダーの伊知地氏。南極にもポナンにも精通している　下：ポートロックロイには郵便局も。最果ての地から出す郵便物は、いつ届くかも楽しみだ

©PONANT

赤を上手に取り込みつつ、スタイリッシュにまとまっている「ル・ボレアル」船内インテリア。ライブラリーを兼ねたスペースでは、南極に関する本を眺めたい

景色は圧巻の一言だ。

ポナンのビジネスディベロップメントマネージャーであり、極地クルーズのエクスペディション・リーダーを務める伊知地亮氏は言う。「ルメール海峡は氷の状態によっては通過すら困難な時もあります。今回も前日までは氷に行く手を阻まれ航行不可でした。翌日以降は他の客船が通過予定のため、まさに今日しかこの景色を拝めるタイミングがありませんでした。常に船長とルートを判断しながら、乗客の方に南極の魅力を可能な限り伝えたいと思っています」。

ポナンの客船には、彼を筆頭に南極のスペシャリストが数多く乗船している。彼らは専門家であると同時に、南極を最も愛する人たちでもある。南極に行く手段としてこのセンスの良いフランス客船を選べば、美食はもちろん、冒険心を満たしてくれる素晴らしい専門家たちとの出会いも待っている。

旅の最終上陸地はウェッデル海に面したブラウンブラフだ。そびえたつ745メートルの茶色の崖と氷帽が、この地の景観の最大の特徴だ。この地域は通常の南極クルーズでめぐる半島の西側海域とは異なる趣を持っている。訪れる客船はあまり多くないのだが、その理由として、近隣海域の海図が未だ不明確だったり、天候の影響を受けやすい場所であることが挙げられる。

ポナンはシーズンになると4隻もの探検船を南極に就航させていて、南極クルーズを行っている船会社の中では数少ない「設計、建造、所有、運航」を全て行なっている船会社である。南極クルーズの先駆者、火付け役とも言っていい。当然キャリアの積み重ねもあり、かつシーズン中は4隻でブリッジの情報を共有しているため、難易度の高いエリアの航行の成功率は高い。極地において安心して身を委ねられる客船とは、なんと心強いことか。

ウェッデル海での最大の見どころは巨大な卓状氷山だ。氷山から派生した流氷の上にはアザラシやペンギンたちが生息する。氷上の動物たちの楽園は、まさに最高の被写体。何度でもシャッターを押したい思う、絶景の連続だった。

©PONANT

白いクロスとイスがさわやかなダイニング。時に極地にいることを忘れてしまう

美食の船、との異名を持つポナン。美しいフランス料理が名物だが、グリルしたてのハンバーガーなど、カジュアルな料理もおいしい
©PONANT

1 極地クルーズでは「今日はどうだった？」など、ダイニングでの会話も弾む　2 見た目も美しいのが、ポナンの料理の特長でもある
3 シンプルでありながら華やかさもあるメインロビーの装飾　4 落ち着きあるラウンジは「憩いの場」。乗客同士が顔見知りになれるコンパクトなサイズもいい

一方で船内に戻ると、ポナンの客船ならではのスタイリッシュなインテリアと、至極の美食の数々が乗客を待っている。センスの良い船内は、冒険の旅を彩りつつも過度に飾らず、乗っているほどにしっくりとくる心地よさだ。

ポナンでの南極クルーズの乗客定員は200人以下に抑えられているので、上陸を待つ時間は決して長くない。一方で100人以下の客船に比べて、パブリックスペースなどに圧迫感はない。講座などが行われるシアターやラウンジも落ち着いて話を聞ける空間となっている。全船、全航路、インターネットが無料のため、情報収集やSNSへの投稿などもしやすいのがうれしい。

客室にも赤が差し色で使われている。トイレとシャワーが分かれているのも日本人にはうれしい

オール・インクルーシブで、ディナーはもちろん、いつでもおいしいワインが飲めるのも、フランス客船らしい計らいだ。発酵バターやオリーブオイルのおいしさは言わずもがな。とはいえ、必ずあっさりした料理のオプションが用意されているのも、極地だとありがたい。ビュッフェには醤油も用意されていて、われわれ日本人をホッとさせてくれる。

南極という秘境は果てしなく遠い場所にある一方で、ポナン客船で一度訪れてみると、急に身近に感じられる。白と青に包まれた氷と、そこに暮らす動物たち、南極を愛する人々に囲まれていると、この地球（ほし）に「生きている」ことを強く感じられるのだ。

取材メモ

南極クルーズの決定版 11日間

日程：2019年1月27日（日）～2月6日（水）
コース：ウシュアイア～アイチョー島～ネコハーバー～パラダイスハーバー～ルメール海峡～ポート・シャルコー～ヴェルナツキー基地～ポートロックロイ～クーパービル島～デセプション島～ハーフムーン島～ブラウンブラフ～ウシュアイア
クルーズ代金：1万550ユーロ～
船名：ル・ボレアル（ポナン）
総トン数：1万944トン
乗客定員：264人（南極クルーズは198人）／乗組員数：140人
http://www.ponant.jp

ポナンの冒険は世界へ広がる

南極クルーズに強いフランス船社ポナンだが、
南極以外にも世界各地の秘境に配船中。
世界でも行きにくい場所を、細かくディープに
めぐれるのがポイントだ。

秘境をめぐり、伝統文化を知る

オセアニア

西オーストラリアの秘境であるキンバリーやパプアニューギニア、ニューカレドニアなどを細かくめぐるクルーズを実施。美しいビーチや知られざる絶景が堪能できるのはもちろん、ポナンのクルーズならアボリジニなど独自の伝統文化を擁す人々との出会いも。日本から発着地へのアクセスも比較的良い。

固有種の宝庫をめぐる

中南米

ピンク色の淡水イルカなど多くの固有種を擁すベネズエラのオリノコ川、豊かな生態系を誇るコルテス海、パナマ沖の美しい島々からなるサンブラス諸島などをめぐるクルーズを実施。専門家たちによる動植物の解説に知的好奇心がくすぐられる。南極クルーズの前にパタゴニア地方をめぐるクルーズも。

ポナン、新造船が続々と就航中

世界初！LNG燃料の砕氷船も予定

近年ポナンは続々と探検船を新造している。エクスプローラー・シリーズと名付けられた1万トン型のシリーズは、2018年に「ル・ラペルーズ」と「ル・シャンプラン」が、2019年には4月に「ル・ブーゲンビル」が就航した。2019年8月に第4船「ル・デュモンデュビル」、2020年には第5船「ル・ジャック・カルティエ」と第6船「ル・ベロ」が就航する。海中の様子を観賞できる海中ラウンジ「ブルー・アイ」を備えるのが特徴だ。

2021年には3万トンの砕氷船「ル・コマンダン・シャルコー」の就航を予定。砕氷船としては業界初の、電気とLNGを燃料とし、エンジンもしくはバッテリーで駆動できるハイブリッド客船だ。

上：海中ラウンジ「ブルー・アイ」。海中のフロアにあり、船体の両サイドにある大面積の透明な窓から海面下の光景を見られる
下：2019年4月に就航したばかりの「ル・ブーゲンビル」（9,900トン）。地中海クルーズを実施したあと、冬季はインド洋などを航行

北の野生動物たちに出会う旅

北極圏

南極に次いで、ポナンが多くの極地クルーズを実施する地。スピッツベルゲン島のロングヤービーエン発着クルーズなど、多彩なコースが設定されている。ポナンのエクスペディション・スタッフが、ホッキョクグマなど野生動物の生態を詳細に解説してくれる。シーズンは5月から9月、最短7泊で行けるクルーズも。

知られざる美島を目指して

アフリカ

アフリカ北西沖に点在する島々からなるカーボベルデやギニアビサウ沖のビジャゴ諸島をめぐるクルーズなどが設定されている。2019年は10月に新造船「ル・デュモンデュビル」がカーボベルデを航行。豊かな自然と、植民地としていたポルトガルとアフリカが混じり合う独自の文化にも触れられる。

手つかずの島、海を満喫

インド洋

長らく大陸から隔絶され、固有の動植物が生きるインド洋の島々。セーシェルのマヘ発着が定番だが、そのほかにもマダガスカルやモーリシャス、タンザニア沖のザンジバル島などを細かくめぐるクルーズが設定されている。ポナンではスキューバーダイビングやシュノーケリングをする機会もある。

Our Fleet

ポナンの客船

エクスプローラーシリーズ

ル・ラペルーズ（2018年就航）
ル・シャンプラン（2018年就航）
ル・ブーゲンビル（2019年就航）
ル・デュモンデュビル（2019年就航）
ル・ベロ（2020年就航予定）
ル・ジャック カルティエ（2020年就航予定）

総トン数：9,900トン
全長：131メートル
乗客定員：184人／乗組員：110人
船籍：フランス／耐氷船

シスターシップシリーズ

ル・ボレアル（2010年就航）
ロストラル（2011年就航）
ル・ソレアル（2012年就航）
ル・リリアル（2015年就航）

総トン数：10,700トン
全長：142メートル
乗客定員：244～264人／乗組員数：140人
船籍：フランス／耐氷船

ル・ポナン（1991年就航）

総トン数：1,443トン
全長：88メートル
乗客定員：64人／乗組員数：32人
船籍：フランス

ル・コマンダン・シャルコー（2021年就航予定）

総トン数：30,000トン
全長：150メートル
乗客定員：270人／乗組員：187人
船籍：フランス／砕氷船（PC2）

お問い合わせ・お申し込みは下記まで

PONANT
YACHT CRUISES & EXPEDITIONS

http://www.ponant.jp